

マルガレーテ・シュッテ=リホツキーの「家事の合理化」： 翻訳と解題

海老澤 模奈人*

Margarete Schütte-Lihotzky's "Rationalisierung im Haushalt".
Its translation and bibliography

Monado EBISAWA*

This paper consists of translation of Margarete Schütte-Lihotzky's essay "Rationalisierung im Haushalt (Rationalization in the housekeeping)" from German into Japanese and its annotated bibliography.

Margarete Schütte-Lihotzky (1897-2000) was a Vienna-born Austrian female architect who worked in Vienna, Frankfurt am Main and Moscow. She is famous for the design of compact kitchen units, so-called "Frankfurter Küche (Frankfurt Kitchen)", which were planned by request of Ernst May, the chief architect in Frankfurt, and built in ten thousands dwellings in Frankfurt between 1926 and 1930. Lihotzky introduced the concept of her kitchen design in the essay "Rationalisierung im Haushalt" published in the magazine *Das Neue Frankfurt* in 1927.

In the following bibliography, the life of Schütte-Lihotzky, the outline and background of this essay and the characteristic and today's situation of the "Frankfurt Kitchen" are explained.

解題

本稿は、オーストリア出身の女性建築家マルガレーテ・シュッテ=リホツキー (Margarete Schütte-Lihotzky: 1897-2000) が 1927 年に雑誌『新フランクフルト』に寄稿した文章「家事の合理化 [Rationalisierung im Haushalt]」を翻訳し、解題を付すものである。訳文は資料として後半に掲載し、前半で解題をまとめている。解題では、リホツキーの生涯と活動、「家事の合理化」の内容とその背景を解説し、さらに「家事の合理化」でも言及されているリホツキーが考案した「フランクフルト・キッチン」について、最新の知見を交えて紹介する。

1. マルガレーテ・シュッテ=リホツキーについて¹⁾

マルガレーテ・シュッテ=リホツキーは、ヴァイマル共和国時代のフランクフルト・アム・マインにおいて、建築家エルンスト・マイ (1886-1970)

の要請に応じて、コンパクトな厨房ユニット「フランクフルト・キッチン [die Frankfurter Küche]」を考案したことで、近代建築史においてしばしば言及される建築家である。オーストリアで最初期の女性建築家であり、波乱に満ちた生涯を送ったことでも知られている。まずその生涯を紹介してみたい。

なお、彼女の呼称についてあらかじめ説明しておく、彼女の生まれの姓がリホツキーであり、フランクフルト時代 (1927 年) に同僚ヴィルヘルム・シュッテと結婚したことにより、シュッテ=リホツキーとなった。現在ではマルガレーテ・シュッテ=リホツキーの名称が研究書等では用いられているが、フランクフルト時代は、マルガレーテを短くしたグレーテ・リホツキーと名乗っており、「家事の合理化」の著者名もそのようになっている。この文章が発表された後まもなく、彼女は結婚した²⁾。本稿では、彼女に対する正式な呼称としては、「マルガレーテ・シュッテ=リホツキー」を用い、文中で彼女を呼ぶときは「リホツキー」とした。

* 東京工芸大学工学部建築学科准教授
2012 年 9 月 11 日 受理

リホツキーは1897年1月にオーストリアのウィーンで生まれた。1915年にウィーンの帝国工芸学校（現在の応用美術大学）への入学を果たした後、建築を選択し、1919年までオスカー・シュトルナート（1879-1935）、ハインリヒ・テッセノウ（1876-1950）らに学ぶ。女性が建築家という職業を選択することがほとんどなかった当時、なぜ他の芸術ではなく建築を選んだのかについて、後に彼女は次のように説明している。一つ目は、建築が明確な課題を通して、つねに目的と結びついている点、言い替えれば芸術のための芸術にならない点、二つ目は、建築には社会・経済のあらゆる状況が反映されており、加えて同時代の技術・学術の知見とも結びついている点、そして三つ目は、それでありながら形を作るという点において建築は紛れもなく芸術に属しているという点である³⁾。リホツキーは、在学中に建築設計案によって女性で最初の賞を受けるなど、頭角を現していく⁴⁾。

卒業後の1920年からはウィーンの住宅計画に携わり、一時期、建築家アドルフ・ロース（1870-1933）とも協働した。そして1921年に、集合住宅の視察でウィーンを訪れたエルンスト・マイを案内したことが、リホツキーのその後の運命に少なからず影響を与えることになる。マイは当時、シレジア地方のブレスラウ（現ポーランド領のヴロツワフ）で住宅地の計画を進めていた新進気鋭の建築家であった。リホツキーはマイをアトリエに招き、自身の住宅の計画案や合理的な家事管理の研究について説明したという。それがマイの興味を惹き、彼がブレスラウで編集していた雑誌『シレジアの住まい〔Das schlesische Heim〕』への寄稿を勧められる。1921年秋、リホツキーにとって初めての原稿が同誌に掲載された。そこではウィーンの集合住宅を題材に、家事の効率化の問題も扱われていた⁵⁾。

1920年代前半のウィーンにおいて主に住宅の計画で経験を積んだリホツキーは、1926年にエルンスト・マイによってドイツのフランクフルトへ呼び寄せられる。マイは市長ルートヴィヒ・ラントマンに請われ、1925年にフランクフルトの高等建築局〔Hochbauamt〕の主任に着任し、同年秋には、フランクフルトの住宅不足を10年間で解消する住宅建設プログラムを作成していた⁶⁾。彼はブレスラウから協働者を引き連れてくるとともに、他都市からも

協力者をフランクフルトに集めたのである。リホツキーのフランクフルトでの活動については後述するとおりである。

マイらの新フランクフルトのチームは、フランクフルトにおいてレーマーシュタット（1927-28）、ブラウンハイム（1926-29）などの26のジードルンク（住宅団地）を実現させ、その過程で建築の規格化など、様々な実験的試みを行った。しかし、フランクフルトでの活動半ばの1930年10月に、マイは社会主義国ソヴィエト連邦からの依頼に応じて、5年間の任期でモスクワへの移住を決行する。彼とともに約20名の建築家がフランクフルトを去った。その中にはリホツキーと夫ヴィルヘルム・シュッテも含まれていた。

ソヴィエトでのマイらの使命は新しい都市を計画することであり、リホツキーは児童用施設部門の主任として、幼稚園や託児所などの計画を任された。このソヴィエト時代の1934年には、リホツキーは夫婦で日本、中国を旅行し、当時日本に滞在していたブルーノ・タウト（1880-1938）とも会っている。1937年、政治情勢の悪化から夫妻でソ連を後にし、パリ、イスタンブール、ロンドンと滞在するが、1940年に反ナチスの運動に加わるために再びウィーンに戻った際に、リホツキーはナチス・ドイツの秘密警察に捕まってしまう。ベルリンの裁判所では死刑を求刑されるが、最終的に懲役15年を宣告され、1945年4月にバイエルン州アイカッハの監獄で解放されるまで彼女は自由を奪われた。

第二次大戦後、リホツキーは一時期共產圏のブルガリアで建築家として活動した後、1947年にウィーンに戻り、住宅の計画、建築国際会議や展覧会への参加など幅広い活動を続けていく。晩年にはウィーン市の賞や複数の大学の名誉博士号を授与されるなど、その活動が讃えられている。100歳を向かえた1997年にはウィーンの応用美術館で大きな式典が催された。そして2000年1月、間もなく103歳の誕生日という日に彼女は他界する⁷⁾。このような長く激しい人生を生きた建築家リホツキーの初期の活動を伝えるのが、「家事の合理化」という文章なのである。

2. 「家事の合理化」の内容とその背景

本稿で訳出した「家事の合理化」は、エルンスト・

マイが創刊した雑誌『新フランクフルト [Das Neue Frankfurt]』⁸⁾に 1927 年に発表された。このテキストは、オーストリア応用美術館が出版した冊子『フランクフルト・キッチン』(1993) にも再録されており⁹⁾、リホツキーが記した文章の中でも代表的なものの一つと考えられる。具体的には、本文中にも記されているように、1927 年のフランクフルト春メッセの企画展「新しい住居とその内装」に寄せられた文章である。タイトルにあるように、家事を合理化(あるいは効率化)するためのキッチンの提案がテーマであるが、設備に関する細かい説明はあまりなく、むしろ世の女性たちに家事労働の無駄の削減を呼びかけ、同時に新しいデザインに目を向けさせようとする啓蒙的マニフェストの色合いが強いものとなっている。「すべての賢明な女性は」という書き出し、そして所々で女性の無知を指摘し、啓蒙しようとする言葉にそれが表れている。

続いて、このテキストの内容をその背景を補足しつつ説明することにした。

リホツキーはまず文章の冒頭で、慌ただしい都市生活の渦中にいる女性たちが、自ら進んで家事の負担を減らしていくことの重要性を訴える。1920 年代のドイツは、新生の共和国として社会変革の途上にあり、女性の社会進出も進んでいた¹⁰⁾。その中で、女性建築家の草分けとも言えるリホツキーが新しいキッチンの形式を提案し、「家事の合理化」を訴えることは象徴的なことだった。

家事の合理化の方法として彼女が最初に言及するのが、集合住宅においてキッチンを共有し、そこでの労働を共同化する方法である。リホツキーはここで、「アインキュッヘンハウス [Einküchenhaus]」、すなわち一つの集中型キッチンをもつ集合住宅の形式を挙げている。その具体的な例について彼女は触れていないが、例えばリホツキーが最初に住宅設計に携わったウィーンでは 1923 年にハイムホーフというアインキュッヘンハウスの例が竣工しており、さらにベルリン、チューリヒ、コペンハーゲンにもその前例があったという¹¹⁾。リホツキーはおそらく、当時ささやかな流行となっていたそのような集合住宅の例を参照したものと思われる。もっとも、このような家事の共同化の試み自体は、古くは空想的社会主義者と呼ばれるシャルル・フーリエ (1772-1837) の提案が有名であるし、『家事大革命』

でドロレス・ハイデンが例示しているように、女性の社会進出が進んでいたアメリカでは 19 世紀後半から数々の同様の試みがなされていた¹²⁾。

いずれにしてもリホツキーは、家事労働とその空間を多人数で共同するアインキュッヘンハウスのような形式については、様々なトラブルを引き起こすものであるとして否定的な見解を示す。代わりに彼女が提案するのが、個々の家庭でなされる家事を、キッチンの平面・空間・設備を改良することで効率化する方法であった。すなわち、「それぞれの家庭ごとに家事を行う形式を維持しながらも、それをできる限り合理的に形作って」いく方法である。ここでリホツキーが重視したのが、「作業の無駄を省くキッチン」であった。このテーマに関して彼女に影響を与えていたのが、産業先進国アメリカからの理論的提案であった。

リホツキーの言によれば、彼女は 1922 年頃に、アメリカ人クリスティーン・フレデリックの著書『新しい家事 [The New Housekeeping]』の独語訳『合理的な家事管理 [Die Rationelle Haushaltsführung]』(イレネ・ヴィッテ訳)を読み、その内容に影響を受けたという¹³⁾。原著となるフレデリックの著作は、アメリカの機械技師フレデリック・テイラーによる有名な科学的管理法テイラー・システムを家事へと適用したものであり、効率の良い家事動作を科学的に分析する手本を示すものであった。リホツキーはそれを参考にして、住宅の計画において家事の負担を減らす方法の研究に着手する。

ウィーン時代から暖めていた「家事の合理化」を広く実践する機会は、先述のエルンスト・マイによって与えられる。前章で述べたように 1926 年初めにフランクフルトの高等建築局に移ったリホツキーは、そのコンセプトをフランクフルトの住宅建設に導入するように求められた。同年、同僚の E.カウフマン¹⁴⁾らとともに彼女は、マイの初期のジードルンクの代表例であるブラウンハイムやブルッフフェルトシュトラッセ (1926-27) の計画に携わる。この過程でキッチンの計画も進められた。

フランクフルトに適した合理的なキッチンの計画に際して、リホツキーはまず居間と食事室とキッチンの関係に着目し、3つの平面タイプの可能性を検討した¹⁵⁾。

一つ目は、キッチンと食事室と居間を一室にまと

める「ヴォーンキュッヘ [Wohnküche]」というタイプ (図1) である。このタイプの利点は、一つの部屋で様々な作業が行えると同時に、暖房用燃料が一つで済むというエネルギーの効率利用にあった。その合理性はいわば農家に見られる昔ながらの居住形式を発展させたものでもあった。しかし、フランクフルトでは全住居に電気もしくはガスが備えられることになったため、このような古い形式をとる必要はなくなった。二つ目は、キッチンと食事室を一体化した「エスキュッヘ [Eßküche]」というタイプ (図2) である。日本のダイニングキッチンに近いこのタイプは、当時理想的な形とされたが、食事室と別に居間を設けることにより住宅の床面積が7㎡増加してしまうため、建設費用が高つくことから、選択されなかった。

そして三つ目がキッチンに特化した空間をつくる「アルバイツキュッヘ [Arbeitsküche]」というタイプ (図3) である。矩形平面の部屋の壁沿いに様々な厨房設備が作り付けられた、家事作業のための空間を計画するものである。この部屋には居間兼食事室が隣接し、二つの部屋が引き戸を介して行き来できる構成となっていた。この戸を通れば、キッチンから食卓まで3.4m以内の歩行で到達できるというのが売り文句であり、引き戸を開放すれば、キッチンから隣室にいる家族の様子を常時眺めることができ、主婦は決して家族から孤立しないことも利点とされた。このタイプがフランクフルトに相応しいキッチンの形式として選択されることになる。

このアルバイツキュッヘの設計において、リホツキーはフレデリックの研究を参考にして、家事作業における歩行距離や手作業の効率性を追求した。実際に彼女は、キッチンを一種の実験室と見立て、作業行程をストップウォッチで計測するような実験

を行ったという。その作業効率を高めるために、限られた空間内に切り詰めた寸法による設備や家具の配置が計画された。このような計画に適う市販の家具はなかったため、リホツキーは家具の設計から始めることになる。最初に設計したキッチン・モデルは、一式で420ライヒスマルクとなり、当時の基準では高額であった。この価格では採算がとれないことがわかり、ディテール等を変更した結果、280ライヒスマルクへと単価が下げられた¹⁶⁾。

このようにして製作されたキッチンのモデルは、1926年秋にフランクフルト市庁舎で最初に展示されている¹⁷⁾。そして、このキッチン計画がより広く公表される機会となったのが、「家事の合理化」で扱われている展覧会「新しい住居とその内装」なのである。1927年春のこの展覧会では、リホツキーが設計した5種類のキッチン・モデルが原寸大で展示された¹⁸⁾。本文中にもあるように、家計収入に応じて規模を変えた3種の、木材で設えられたキッチンと、建材を変えた2種類のキッチン、すなわち成形石板によるキッチンと金属製のキッチンのモデルである。この中で広く実用化したのは、最も規模の小さい木製キッチン、すなわち「家政婦なしのキッチン」のタイプであった。このタイプが後の様々な文献で紹介され、後述するように「フランクフルト・キッチン」の典型的なモデルとして認められていくようになる。他のモデルは、2番目の「家政婦一人のキッチン」を除いては実現していない¹⁹⁾。建材を変えたタイプはそもそも価格が高つく、実用化に向いていなかったという²⁰⁾。このように複数のモデルが試行的に提示されていたことは、この展覧会がフランクフルトのジードルンク建設における発展段階のものであったことを示していると考えられる。

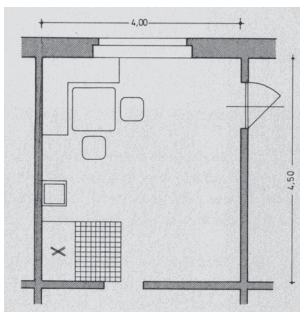


図1 ヴォーンキュッヘ

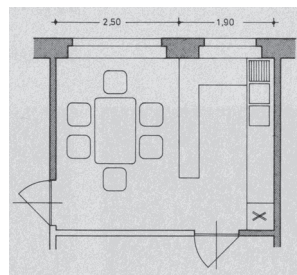


図2 エスキュッヘ

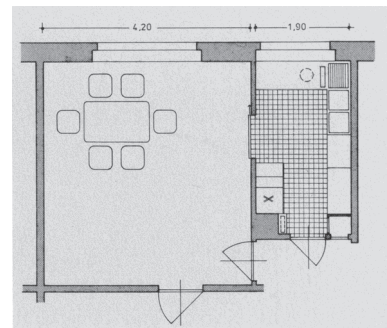


図3 アルバイツキュッヘ

ちなみにこの展覧会には、リホツキーが合理的キッチンを実際設計する際に参考にしたというミトロバ社製の食堂車の厨房も展示されていた。近代建築ではル・コルビュジエを筆頭に、しばしば自動車や客船といった機械（乗り物）とのアナロジーが提示される。リホツキーのこの提案は、建築と鉄道車両の対比という独自の視点を提示していて興味深い。

「家事の合理化」の後半では、家事を合理化する上でのエネルギーの問題についても言及されている。フランクフルトのジードルンクではこの時期、電化が進められ、例えば大規模ジードルンクのレーマーシュタットでは全家庭に電気が通っていることが当時から注目されていた²¹⁾。ちなみに、リホツキーの前任地ウィーンでは1920年代に建設された社会福祉的な集合住宅にはまだ電気が通っておらず、ウィーンと比べてときのフランクフルトでの設備面での先進性について、リホツキーは後に自伝の中で強調している²²⁾。ただし訳文中にもあるように、フランクフルトでも家庭への電力普及はまだ中途段階であったようだ。リホツキーは、電気、ガスというエネルギーを家庭のキッチンで導入する可能性を語ると同時に、洗濯のような重労働については、集中洗濯場における電気洗濯機の効用をアピールしている。さらに照明に関しても、傘や室内の工夫を通して、そのエネルギーを無駄なく効率的に利用する方法に注意が払われている。そして最終的には、そのような実用性・機能性の問題をデザインの問題と結びつけ、女性たちに、旧態依然たる住宅設備からの脱皮を訴えかけるのである。

3. フランクフルト・キッチンの実際

「家事の合理化」では詳しく説明されなかったリホツキーの最大の功績「フランクフルト・キッチン」は、実際にはどのようなものであったのか。その点について補足する必要があるだろう。

フランクフルト・キッチンを紹介する文献ではしばしば、このキッチンが1926年から1930年にかけてフランクフルトの約1万戸の住居に導入されたと記されている。つまり、「フランクフルト・キッチン」とは、この時代にリホツキーの原案をもとにフランクフルトの住居に設置されたキッチンの総称である。同時期にエルンスト・マイのもとで建設されたジードルンクの総戸数が約1万2千戸と言われ

ているから²³⁾、その多くにリホツキー考案のキッチンが導入された計算になる。このことはフランクフルト市に対するマイの政治的な働きかけの結果であったとされる。彼はリホツキーの「家事の合理化」のコンセプトを、フランクフルト市議会でも広めるべく努めていた。その彼を支持した社会民主党の市議会議員エルザ・パウアーが、1926年3月31日の市議会でも、住宅においてすべての必要な設備は家事を合理化するために導入されるものとする、というリホツキーらに有利な提議を行ったのである。それが認められた結果、合理的なキッチンの全面的な導入が進められたとされる²⁴⁾。

ちなみにリホツキーの記憶によれば、「フランクフルト・キッチン [Frankfurter Küche]」という名称は、マイが考案し宣伝的に用いたものであったという。彼は、このキッチンが一人の女性によって、世の女性たちのために創り出されたことの必然性を繰り返し強調したという。そこには、このキッチンをわかりやすく世に広めようとしたマイのしたたかな戦略があったようだ。というのも、自身が後に告白しているように、リホツキーは普段家事をするような女性ではなく、その時まで調理をした経験さえほとんどなかったというのだから²⁵⁾。

リホツキーが設計したフランクフルトのキッチンは、実際には住宅の間取りに応じて様々なヴァリエーションが見られた。その中でも最も典型的なものと認められ、そのイメージを決定づけているのが、上述したように、1927年に展示された「家政婦なし

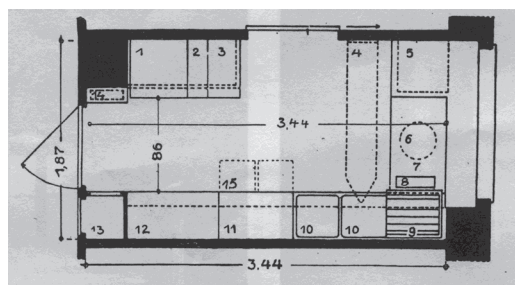


図4 「フランクフルト・キッチン」平面

図版中の各要素の説明：

1. レンジ、2. 物置台、3. 調理箱、4. 上げ下げ式の板（アイロン台）、5. 食物貯蔵箱、6. 椅子、7. 机、8. ゴミ入れの穴、9. 水切り台、10. 流し台、11. 貯蔵用引き出し、12. 鍋収納棚、13. ゴミ・ほうき収納棚、15. 引き出し可能な物置板

のキッチン」のタイプ（図4～7）である。ひとまずそれを「フランクフルト・キッチン」と呼ぶこととし、その主な特徴について、ここでリホツキーが後に記した文章を参照しつつ、解説したい²⁶⁾。

このキッチンは3.4m×1.9mほどの矩形平面からなり、その壁沿いに、家事のための様々な設備が備え付けられたものである（図4）。まず廊下から入ると、正面には窓が見える（図5）。この窓の下に作業机が置かれている。この窓と机の間にわずかなスペース（壁面）があるが、これは窓台に置かれたものが、窓の開閉によって邪魔にならないようにするための配慮という。作業机には、洗浄が容易なブナ材が用いられた。この机の右端には四角い穴が空いていて、そこに調理の際に生じた切りくずを落とすようになっている。当時、電気冷蔵庫はまだ普及していなかったため、その代わりに窓の下に食物貯蔵箱が置かれている。その貯蔵箱と接した外壁には小さな通気用の開口部が設けられていた。

窓に向かって右手の壁面には、流し台が設置され、その左側（部屋の隅部）に水切り台が置かれた（図6）。左手で皿を取り、洗って、元の位置に戻すのにはこの配置が都合良いと考えられた。流し台の右隣には、取っ手のついたアルミニウム製の引き出しが縦3個、横6個の計18個並んでいる。おそらくこの引き出しは、フランクフルト・キッチン の設備の中でも最も有名なものであろう。小麦、米などの食材や調味料を入れるためのもので、引き出しから直接別の容器や鍋に中身を移すことができるように、

先端部分に注ぎ口が付いている点の特徴である。また、この引き出しの近くには、小麦粉を常備するためのオーク材製の大きな引き出しも備え付けられていた。素材の選択は、オーク材に含まれるタンニン酸が虫を除ける効果を持つためという。

窓に向かって左側の壁沿いには、レンジなどが設置された。窓に近い壁面には、大きな板が立てかけられている。その板の上部の留め金を外し、下辺を軸にして下ろすと、板の片側が流し台で支えられ、アイロン台として機能するようになっている。レンジの隣には、調理箱〔Kochkiste〕と呼ばれる設備が置かれている（図7）。その天板は金属製であり、熱い鍋を直接置くことができる。中には金属のシリンダーが収容されており、それが断熱効果を持つため、保温容器として機能する。朝に調理した料理をこの箱に入れておけば、仕事から帰宅した後でもそれを取りだして食べることができたという。

部屋の維持しやすさも考慮されていた。例えば壁沿いの戸棚と天井の間に隙間を作らないことで、ほこりがたまるように工夫する、あるいは、床上には表面をセラミックで被覆した高さ10cmほどのコンクリート製の台を設け、その上に家具を載せることで床の清掃をしやすくするなどの配慮がなされている。天井から吊り下げられた電灯は、傘での反射によって部屋全体を照らし、取っ手を引くことで上下に動かすこともできた。室内の木材は青く塗られたが、それはフランクフルト大学の研究により、青色がハエ除けの効果をもつとされたためである。



図5 フランクフルト・キッチン

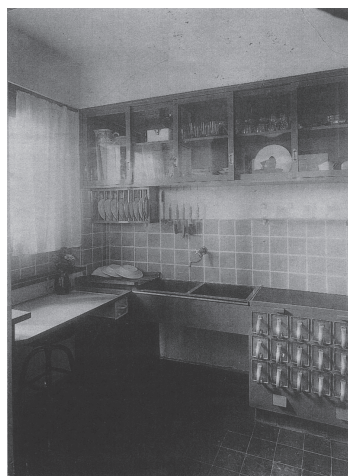


図6 同左（流し台、引き出し）

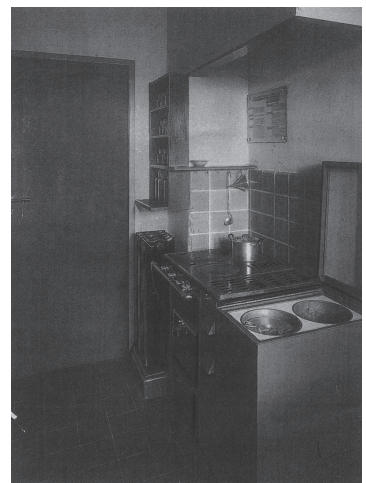


図7 同左（レンジ、調理箱）

以上見たように、フランクフルト・キッチンとは、様々な工夫が込められたキッチンである。もちろんそれらは、現代の感覚からすればロー・テクノロジーの工夫であるが、そこに 1920 年代という時代の状況を知ることができる。

ところでこのフランクフルト・キッチンの基本モデルでは、左側壁のアイロン台と調理箱の間に、隣の居間兼食事室に通じる引き戸が設けられている(図 4)。この引き戸は、前述したようにキッチンの構想段階からリホツキーがこだわりを持って計画していたものであり、キッチンを家事作業に特化した空間として機能させながら、同時に居間・食事室と空間的なつながりを持たせるという点で、フランクフルト・キッチンにおいては本来欠かすことのできない要素であった。しかしこの引き戸が、実際の住戸への導入過程ではしばしば断念されていったという。そのことが、フランクフルト・キッチンの後の評価に少なからず影響を与えていく。すなわち、この引き戸を省略したことが、このキッチンの「実験室のような」²⁷⁾性格を強め、時として女性を孤立させる空間というネガティブな印象を増幅させる一因になったように思われる。リホツキー自身も回想録の中で次のように述べている。

「……キッチンと居間をつなぐ広い戸がしばしば省略され、絶対に必要なキッチンと居間のまとまりが破壊されました。しかしそれでもフランクフルト・キッチンは作り付けられたのです。小さなことが大きな影響を与えます。母親は、キッチンでの作業の間、居間で遊ぶ子供たちをもはや見ることができなくなってしまいます。レンジ、調理机、流し台から食卓までの距離は、3m から 6m になりました！さらにはこの間に二つのドアを開けなければならないのです。」²⁸⁾

4. フランクフルト・キッチンの現在

80 年以上経過した現在、フランクフルト・キッチンはどのような状況に置かれているのか。最後に、現在のその姿について触れておきたい。それが「家事の合理化」の歴史的な意味を少なからず示唆するものでもあると思われるからである。

1920 年代後半のジードルンクに導入されたフランクフルト・キッチンが、当初の姿のままで現在も維持されている例は、実際にはほとんどない。なぜ

なら、キッチンは日々の作業に用いられるために消耗が激しく、その設備は新しい技術が生まれる度に交換されていくからである。リホツキー自身もそのことは覚悟していたようで、例えばこのキッチンの木材は、長くて 30～35 年しかもたないと記している²⁹⁾。ゆえに現在のわれわれが、現役で使われているフランクフルト・キッチンを目にすることはほぼ不可能だが、展示として再現されたキッチンを確認することはできる。

リホツキーが建築を学んだウィーンの工芸学校(現応用美術大学)に隣接するオーストリア応用美術館には、前章で解説したフランクフルト・キッチンの基本タイプが復元され、常設展示されている。実はこの復元作業は、正確さの追求という点で、困難を伴う作業だったという³⁰⁾。というのも、復元に使えるような詳細なオリジナル図面はそもそも見当たらず、あるとすれば簡略化された図面や図 5～7 のようなモノクロ写真に限られていたからである。また、すでに述べたようにオリジナルの姿を示す残存例もなく、根拠が極めて乏しい状態であった。幸い設計者のリホツキーが存命で、彼女の記憶を頼りに復元を進めることができた。もちろん、ディテールがはっきりとわからず、想像で補われた部分もある。その点でこの復元作業は、一つの創作物業であったとも言われている。

このキッチンは、1998 年に東京都現代美術館で開催された「建築の 20 世紀展」でも復元展示され、日本にも馴染みのあるものとなった。ここで面白いことに気づく。フランクフルト・キッチンは、その直接の利用者でない大多数の人間にとって、実は展示を通してしか知り得ないものだということである。近代建築の通史に掲載されるなど広く流布しているフランクフルト・キッチンのお決まりの写真(特に図 5)は、「家事の合理化」が扱った 1927 年春の展覧会のときのものと考えられる。この展覧会のモデルを通して、われわれはフランクフルト・キッチンを把握しているが、しかし実際の住宅での状況は実はよくわからない。そしてそれを復元しようにも、その実態が正確にはつかめないものになってしまうのである。つまり、フランクフルト・キッチンは歴史上とても有名なキッチンであるけれど、実は詳しいことはよくわからないキッチンなのだ。展示されたサンプルとして、われわれの記憶

の中に生きつづけているのがフランクフルト・キッチンと言えるだろう。

このフランクフルト・キッチンが、実際の建築の中に再現展示されている住居がフランクフルトにある。「新フランクフルトのモデル住宅」としてジードルンク・レーマーシュタット内に復元され、2010年にオープンしたエルンスト・マイ・ハウスである。博物館ではなく、本来の住宅の中にフランクフルト・キッチンが完全な形で復元された唯一の例という³¹⁾。この住居を訪ねた印象について、最後に記しておきたい。

ここでは、庭付きテラスハウス型住居の庭側1階部分にフランクフルト・キッチンが再現されている(図8)。壁に立てかけられたアイロン台や取っ手の付いたアルミ製の引き出しなど、フランクフルト・キッチン固有の設備を確かに目にすることができる(図9)。しかし各要素の配置は、図4の基本モデルとは多少異なっている。間取りに応じてアレンジされた結果だろう。隣室の居間との間の引き戸は、ここでは片開きの扉となっており、入口のすぐ横という位置の問題もあって、リホツキーが狙っていた効果が半減している印象を受ける。

それはともかく、近代的な実験室のような厨房空間を想像してここを訪問すると、その期待は裏切られてしまう。というのも、実際に目にとると、このキッチンは極めて簡素で、年代を感じさせる空間なのである。色彩が統一されたシンプルなデザインは、

時代を超えたデザインと言えるかもしれないが、何とも時代遅れな印象を与えるのはやはり調理器具などの設備である。例えば1928年製のレンジは電気と炭を燃料として併用している。当時のフランクフルトでは電化が進められていたとはいえ、電気はまだ貴重なエネルギーであったことを示している。流しや作業机などの造形は、現代のキッチン設備と比べて実に簡素な作りである。最も隔世の感があるのは冷蔵庫の有無である。すでに述べたとおり、当時は冷蔵庫の代わりに食物貯蔵箱が置かれていた。庭からキッチンの外壁を見てみると下の方に格子の付いた小さな開口部が設けられているのが見える(図10)。ここで外気と接し、貯蔵箱の通気を確保していたことがわかる。

シンプルなデザインと初歩的なテクノロジーで設えられた空間、それが現代から見たフランクフルト・キッチンである。しかしそうは言っても、そこには建築家による様々な試行の跡が表れている。限られた空間とエネルギーを、建築と家具や道具の工夫によって効率的に利用しようという試みである。それは、エネルギーの効率利用が問われる現代においてこそ、モデルとなるべき一つの態度のように思われる。そこにリホツキーら1920年代の建築家たちの活動の意義を改めて認めることができるのである。



図8 エルンスト・マイ・ハウスのフランクフルト・キッチン



図9 左手にアイロン台、中央に引き出し、右側手前にレンジ

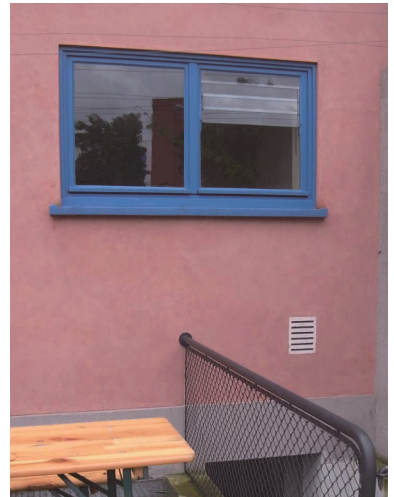


図10 キッチン部分の庭側外壁(右下に小さな開口がある)

注

- 1) リホツキーに関する主な研究としては、Peter Noever (ed.), *Die Frankfurter Küche von Margarete Schütte-Lihotzky*, Berlin, 1993 (以下、Noever (1993)) および Peter Noever (ed.), *Margarete Schütte-Lihotzky: Soziale Architektur; Zeitzeugin eines Jahrhunderts*, Wien/Köln/Weimar, 1996 (2.Aufl.) (以下、Noever (1996)) の2冊があり、本稿でもリホツキーの活動とフランクフルト・キッチンに関する基本的な情報についてはこの2冊を参照している。さらに、リホツキーによる回想録が2冊出版されている。1冊はナチスへの抵抗時代を回想した自伝 (Margarete Schütte-Lihotzky, *Erinnerung aus dem Widerstand*, Wien, 1994)、もう1冊は学生時代からフランクフルトでの活動までを記した自伝 (Margarete Schütte-Lihotzky, *Warum ich Architektin wurde*, Salzburg, 2004 (以下、Schütte-Lihotzky (2004))) である。日本でリホツキーとフランクフルト・キッチンに言及した文章としては、多木浩二「フランクフルトの台所. 20世紀のイデオロギーとしての機能主義」『へるめす』第19号, 岩波書店1989年5月 (以下、多木(1989)), pp.1-12、牧田知子「フランクフルト・キッチン」『10+1』No.16, 1999年3月, pp.180-187、田中純「20世紀の「ドール・キッチン」—「新しい女」マルガレーテ・リホツキーとフランクフルト・キッチンをめぐる」『パウハウス・テイスト パウハウス・キッチン』美術出版社2010, pp.29-35などがあり、適宜参照した。特に多木(1989)には、リホツキーへのインタビュー記事が掲載されており、参考になる。
- 2) Schütte-Lihotzky (2004), p.227
- 3) Schütte-Lihotzky (2004), p.32
- 4) Schütte-Lihotzky (2004), p.26
- 5) Renate Allmayer-Beck, 'Realisierung der Frankfurter Küche', in : Noever (1993), pp.20-23 (以下、Allmayer-Beck (1993)), p.20 および Schütte-Lihotzky (2004), pp.105-106。なおリホツキーの回想録には、マイを最初に案内したのが「1922年もしくは1923年の春」と記されているが (Ibid., p.105)、リホツキーの論文の発表時期から判断して、1921年の間違いと考えられる。
- 6) エルンスト・マイに関する最新の研究としては、Claudia Quiring et al. (ed), *Ernst May 1886-1970*, München, 2011がある。同書については、拙稿「文献抄録：『エルンスト・マイ 1886-1970』」『建築雑誌』2012年8月号, pp.120-121で紹介しているので、参照されたい。
- 7) ソ連移住後のリホツキーの活動については、主として Schütte-Lihotzky (2004), pp.221-234 の年譜を参照した。
- 8) 『新フランクフルト [Das Neue Frankfurt]』は、エルンスト・マイが1926年秋に創刊した月刊誌。毎号特集が組まれ、フランクフルトでのマイらの建設活動を公表するとともに、前衛的な建築・芸術の紹介・批評もおこなわれた。同誌は1926-31年の5年間続き、後継誌『新都市 [Die Neue Stadt]』に引き継がれた。リホツキーの「家事の合理化」は、第1巻(1926-27年)第5号 (April-Juni) のpp.120-123に掲載された。
- 9) Noever (1993), pp.16-19
- 10) 2000年代になって、20世紀初頭のドイツにおける女性建築家の活動に関する研究書がいくつか出版されている。女性と近代建築というテーマは、近年一つのブームを形成しているようである。参考までに以下の3冊を記しておく。Ute Maasberg et al., *Die Neuen kommen!: Weibliche Avantgarde in der Architektur der zwanziger Jahre*, Hamburg, 2004 (2.ed. 2005) / Ulla Terlinden, Susanna von Oertzen, *Die Wohnungsfrage ist Frauensache!: Frauenbewegung und Wohnreform 1870 bis 1933*, Berlin, 2006 / Ulrike Müller, *Bauhaus-Frauen: Meisterinnen in Kunst, Handwerk und Design*, München, 2009
- 11) Inge Podbrecky, *Rotes Wien*, Wien, 2003, pp.82-85。同書をもとに以下にハイムホーフ [Heimhof] について記す。ハイムホーフは、ウィーン15区のPilgerimgasse 22-24にOtto Polak-Hellwigの設計で1923年に竣工した集合住宅である。就労者用の24戸の小規模な住居を収容し、食事は大規模な共同キッチンで作られ、共同の食事室で提供された。また掃除・洗濯を行う専門の女性がいた。各部屋は2室までの個室とトイレ、

小さな飲み物準備用のキッチン〔Teeküche〕があるのみだった。共同室としては他に、読書室、面会室、浴室、幼稚園、屋上テラスが用意されていたとされる。「協同組合ハイムホーフ」を施主として建設されたが、1924年にはウィーン市の所有に移り、1925-26年に246戸の集合住宅へと拡張された。

- 12) ドロレス・ハイデン（野口美智子・藤原典子他訳）『家事大革命。アメリカの住宅、近隣、都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』勁草書房 1985（原書：Dolores Hayden, *The Grand Domestic Revolution*, MIT Press, 1981）
- 13) Margarete Schütte-Lihotzky, 'Die Frankfurter Küche', in : Noever (1993), pp.7-15（以下、Schütte-Lihotzky (1993)）, p.7
- 14) Eugen Kaufmann (1892-1984) : マイが南チロルからフランクフルトに呼び寄せた建築家。フランクフルト高等建築局には「都市計画部門」と「規格化部門〔Abteilung T〕」があり、後者の主任をカウフマンは務めていた（Schütte-Lihotzky (2004), p.120 参照）。
- 15) Renate Allmayer-Beck, 'Zusammenhänge zwischen Wohnungsbau und Rationalisierung der Hauswirtschaft anhand der Küchenplanungen von Margarete Schütte-Lihotzky', in : Noever (1996), pp.235-245（以下、Allmayer-Beck (1996-2)）, p.240. なお、Schütte-Lihotzky (1993), pp.8-9 には、この3タイプに「コッフニッシェ」〔Kochnishe : 居間と食事室が一体化した部屋にニッチ状のキッチンがついたタイプ〕という平面形式を加えた4タイプの平面図が掲載されているが、それらの説明文が入れ替わってしまっている。
- 16) Allmayer-Beck (1996-2), p.243、Schütte-Lihotzky (2004), p.160 など。このキッチンの建設費が家賃に上乗せされた場合、一ヶ月当たり2~3ライヒスマルクの負担増で済んだという。実際に1926年5月に建設が始まったブラウンハイム、ブルッフフェルトシュトラッセ、ギンハイムのジードルンクにおいて、最初のキッチンがすでに1000台導入されている。このキッチンは規格化を意図したものではあったが、当時の技術では、コスト削減のための大量生産は50台が限度だったとされる。50を超えてしまうと、大

量生産であっても価格を下げることはできなかった（Allmayer-Beck (1996-2), pp.243-244）。

- 17) Schütte-Lihotzky (2004), p.160
- 18) 展覧会では他に、マイ、カウフマン、リホツキーらが設計したプラッテンハウス〔Plattenhaus : 板状の部材を組み合わせて建設するプレハブ形式の住宅〕やリホツキー設計のクラインガルテン〔Kleingarten : 都市内の小菜園〕用の小住宅、さらにリホツキー夫妻設計の週末住居も家具を完備した形で原寸大で会場内に展示された（Renate Allmayer-Beck, 'Margarete Schütte-Lihotzkys Tätigkeit am Frankfurter Hochbauamt', in : Noever (1996), pp.71-81（以下、Allmayer-Beck (1996-1)）, p.77）。
- 19) Noever (1993), pp.92-98
- 20) Allmayer-Beck (1993), p.23
- 21) Helen Barr et al. (ed.), *Das Neue Frankfurt*, Frankfurt, 2007, pp.22-23
- 22) リホツキーが1920年代のウィーンとフランクフルトの社会福祉的な住宅建設を比較して論じた以下の文章は興味深い。「ウィーンでは（住宅の）建設が1919/20年には始まり、フランクフルトではようやく1926年になって始まった。ウィーンでは住宅の建設が完全に、用途指定の累進的な住宅建設税と、贅沢・娯楽税によって出資されていた。それゆえ、建設費が家賃には依存しないようなシステムができ、家賃は最低収入に応じて査定された。その結果、最貧者や子供が多い家族はその悲惨さから解放された。結局のところそれがウィーン市の大きな功績であり、建築（が功績）ではなかった。フランクフルトでは、税から支出されたのは建設費の半分より少なかった。ゆえに家賃は労働者には高すぎた。ウィーンでは、資力の劣る人のために急いで住宅が造られた。フランクフルトでは、進歩的な技術的手段を用いて時代にふさわしい住居のモデルを提示することが重要だった。ウィーンではシンプルに建設され、浴室や中央暖房システムもなく、代わりに集会的な文化的施設、たとえば浴場、クラブの図書室、集会室が用意された。そういった施設はフランクフルトでは議論されることがなかった。むしろ個人の生活を導くことが好まれた。・・・ウィーン

の住宅はもともと下からの運動を通して成立した。・・それに対してフランクフルトで（中心となったの）は、進歩的でリベラルな政治家のエリートであった。・・彼らは住宅建築における進歩をもたらした。ウィーンと比べると上から促進させたのである。」(Brigitte Huck, 'Das Neue Frankfurt', in : Noever (1993), p.48 の引用より訳出 (括弧内は訳者による補足))

- 23) Helen Barr et al., op.cit., p.8
- 24) Renate Allmayer-Beck (1996-1), p.75
- 25) Schütte-Lihotzky (2004), pp.148-150
- 26) Schütte-Lihotzky (1993), pp.9-14. この文章をリホツキーがどの時点で記したかは不明。多木 (1989) にも同じような記述が見られるが、おそらくリホツキーが記した同じ文章を参照したと思われる。なおここでは、Schütte-Lihotzky (2004), pp.155-157 も補足的に参照した。
- 27) 例えば、ケネス・フランプトン (中村敏男訳) 『現代建築史』青土社 2003, p.242 など。
- 28) Schütte-Lihotzky (2004), p.130
- 29) Schütte-Lihotzky (2004), p.148
- 30) Gerhard Lindner, 'Kopie oder Original?: Zur "Rekonstruktion" der Frankfurter Küche', in : Noever (1993), pp.41-42
- 31) Eckhard Herrel, 'Ein Musterhaus des Neuen Frankfurt', *Denkmalpflege & Kulturgeschichte*, 4-2010, pp.22-28

図版出典

図 1～3: Noever (1993), pp.8-9, 図 4～7: Noever (1996), pp.93-95, 図 8～10 : 筆者撮影

翻訳

「家事の合理化」(1927)

グレーテ・リホツキー著

すべての賢明な女性は、これまでの家事のあり方の遅れを自覚し、そこに自分自身と家族の発展をは

ばむ、極めて重い障害があることを認識しなければならない。今日の大都市の慌ただしい生活では、女性たちは、80 年前ののんびりとした生活に比べてはるかに高度な要求を突きつけられているが、それにもかかわらず、ごくわずかな負担の減少をのぞけば、今なお祖母の時代と同じように家事を行わざるをえない状態にある。

主婦の仕事をより合理的なものにするという問題は、ほとんどすべての階層の人間にとって、同等に重要性を持つものである。たいていは何の助けもなく家事を切り盛りしなければならない中間階級の女性も、絶えず他の仕事にも気を配らなければならない労働者階級の女性も、ともに過度に負担をかけられており、その過剰な労働が長く続けば、国民全体の健康にとって大きな問題が生じることだろう。すでに 10 年以上も前に、先進的な女性たちは、家事における不要な労働から主婦を解き放つことの重要性を認識し、複数の住戸のための集中的な家事労働というテーマに取り組んだ。すなわち、アインキュッヘンハウス [Einküchenhaus : 一つの集中型キッチンをもつ集合住宅] の建設である。彼女たちは次のように言っていた。なぜ 20 人の女性が買い物に行くのだろうか？ その内の一人でみんなの分を済ませることができるというのに。なぜ 20 人の女性が 20 台のレンジに火を付けるのだろうか？ 一台のレンジで全員のために調理できるというのに。なぜ 20 人の女性が 20 の家族のために調理することになるのだろうか？ 正しく配分すれば 4～5 人で 20 家族分の作業が済ませられるというのに。分別のある人なら皆納得するようなこの考え方は、人々を魅了した。そして、アインキュッヘンハウスが建てられた。しかし間もなく、20 の家族を何の問題もなく一つの家事へと統合することは不可能だということが明らかになった。個人的な口論やけんかは目をつぶるとしても、様々な住民による物の置き場が絶えず変わってしまいひどく不安定になる状態が避けられず、そのため、多くの家族を一つにまとめることは必然的に衝突へと至ってしまうことがわかったのである。ただしここで断っておくが、比較的近い将来に失業する可能性のある労働者やサラリーマンに対しては、アインキュッヘンハウスという選択肢は初めから除外されるだろう。というのも、失業者はその生計を自身にとって必要なもの

からさらに切り詰めることはできないからだ。さて、要するに家事の合理化という問題は、それだけのために解決されるものではなく、当然、社会的な問題を考慮することと結びついているのである。

これまでの経験から分かることは、われわれはそれぞれの家庭ごとに家事を行う形式を維持しながらも、それをできる限り合理的に形作っていかねばならないということである。しかし、いかに、これまで労力も時間も浪費することを当然としてきた家事作業の在り方を改善しうるのか？ そこでわれわれが家事労働へ転用できる原理とは、その実現のおかげで工場やオフィスにおける作業効率が予想外に上昇したような、作業の無駄を省く、効率の良い企業経営の原理である。われわれが認識しなければならないことは、どのような作業に対しても、疲労を最小限に抑えるような、最良の、そして最もシンプルな経路が必要だということだ。主婦、製造業者、建築家という3つの作業グループが、共同しながら、あらゆる家事を行う上で適用できるような最もシンプルな方式を確定させ、それを可能なものにするという作業を行うことになったが、それは彼らにとって重要かつ責任の重い課題なのである。

主婦の中でも、知的に訓練された女性は、ますます合理的に作業するようになるだろう。適切な器具や機械を用い、住居計画を正しく行うことにより、彼女たちは、自分たちの作業における最も実用的な方法をまもなく知ることになるだろう。

今日の製造業者（家具製造業者は除く）の中にはすでに、現代の新しい要求に対応し、役にたち、作業の無駄を省くような器具や機械を商品として取り扱うものが数多くいる。しかし、はるかに大きく遅れを取っているのは、住宅の設備の方である。どういう種類の住宅設備が最も実用的で最良かということ、一般の人々はいつになったら認識するのだろうか？ 何年にもわたって、ドイツ工作連盟とそれぞれの建築家たちは努力を重ね、数え切れないほど多くの著述や講演を行って、設備の明瞭さ、簡素さ、実用性を提唱したり、過去 50 年来のキッチンからの離反を求めたりしたのだが、それらは全くと言っていいほど役に立たなかったのである。

住居に入れば、われわれは依然として年代物のがらくたや、品の悪いお決まりの「装飾」を見つける

ことができる。上述したような努力が、実際にはほとんど成果を見なかったのは、奇妙にも新しい理念をほとんど受け入れようとしない女性にこそ原因があるのだ。家具商人が言うには、購買者は今も変わらず古いものを求めるとのことである。女性たちは、「懐かしくて居心地の良い」わが家を確保するために、好んでたくさんの仕事を引き受けようとする。**今日でも多くの人が、簡素さと実用性を無味乾燥と同じ意味だと考えている。**フランクフルト・アム・マイン市の高等建築局は、フランクフルト見本市で開催された「新しい住居とその内装」と題する展覧会において、設備を完全に整えたモデルハウスを提示することにより、反対の立場に立つ人々を納得させようとした。そこで証明が試みられているのは、簡素さと実用性によって作業の無駄がなくなるということだけではなく、それが良質の材料および適正な形態・色と結びつくことにより、明瞭さと美しさが生まれるということである。

この展覧会では、フランクフルト主婦協会の展示区画において、家事の合理化の重要性が特別にはっきりと示されたのであった。「新時代の家事」と題したこの展示区画では、まず第一に、作業の無駄を省くキッチンの問題が取り扱われた。足の運びや手の握りといった動きに関する無駄を省いた設備の好例として、最初に、完全に設備を整えられた食堂車のキッチンと配膳室が展示された。さらに、家具が組み込まれた3つのキッチンが展示され、家具を適正に区分し配置することで、作業の軽減が可能であることが示された。ちなみに、この3つのキッチンの内、最初の2つは、フランクフルトにおいて約3000台製作されることになっている。なお、ここでは以下の3つの異なるキッチン利用のタイプが考慮されている。

1. 家政婦なしの家事(年収 5000 マルク程度まで)
2. 家政婦一人の家事(年収 10000 マルク程度まで)
3. 家政婦二人の家事(年収 10000 マルク以上)

これらの木製のキッチン設備以外にも、独身者用住居に設置する金属製の小規模なニッチ状の炊事空間や、洗浄可能な整形石材を用いたキッチンも展示された。この2つのキッチンは、木製のものに比べて外面的な影響を受けにくい新しい有効な材料

を見つけようとする試みを示すものであった。すべてのキッチン、作業の無駄を省くために小規模であり、居間から完全に分離可能である。かつての住宅のキッチンの形態は、もはや時代遅れに見える。さらに見本として自由に試すことができ、購入も可能である、家事労働の軽減に明らかに貢献すると思われるキッチン用家具も披露された。住宅・キッチン用具の良いもの悪いもの、作業を浪費するものとその無駄を省くもの、洗浄がしやすいものと難しいもの、そのような違いが、様々な色の札によって識別できるようにされていた。陶磁器製の食器を乾かす際の手間を省いてくれる、ボール・皿・カップ用の水切り台や、適量の粉をボールに流し込むために用いる漏斗などの展示は、主婦たちに、他国ではすでに定評のある設備を見せるものとなった。

とりわけ注目を集めたのは、電気器具・用具の展示であった。現在ではまだ、経済力の乏しい人々にとっては実際に利用することはできないものであるが、しかし、近い内に電力化したキッチンが発展する見込みのあることが、私たちにはわかっている。大規模な住宅街区にそれぞれ設置されるような、電気式の集中洗濯設備のサンプルを見れば、女性たちはそれを利用することで作業が軽減されることを知り、収入の少ない家族にとっても割に合うようなタイプの洗濯設備を、十分な数だけ必要であると思うようになるだろう。フランクフルト市内のある集中洗濯場では、利用者の要望から、電気洗濯機以外に手動の洗濯機も設置された。しかし一年たった現在では、手動の洗濯機はひっそりと静止したままである。すべての女性が電気式の方で洗濯をしたいと思っているからだ。平面 1.65×1.35m からなる「極小の空間に設けられた極小の浴室」は、「各住居に一つの浴室」という要求がもはや実現不可能な理想ではないことを証明している。10 分の 1 の住居模型や 1.6 m² に計画されたシャワー室を展示することで、二つの寝室の間に設けられた「ニッチ状の洗面室・シャワー室」によって空間を効率利用する可能性が提示された。水を継続的に流すことによって、ここでは、たらいを使うときに比べて、洗浄が徹底的になされるのである。

さらに、ガスの設備が完全に整えられた一家族用住宅のモデルを展示することで、家事においてガスを広範囲に利用する可能性もはっきりと提示され

た。住宅における良質な採光という重要な問題については、この展覧会では特別に入念に取り扱われた。照度を高めるカーペットを選択するだけで、どれほどの金額が節約できるか？ 購買者の多数を占める女性たちが、照明工学的に申し分ない適正な作業ランプに目を向けさせられ、そのおかげで、黒ずんで埃が溜まってしまうような絹製の傘をかぶった、小さくて飾りのついたフロアランプを軽率にも買うことがないということは、家族の健康にとってどれほど重要であることか。

われわれの周囲が粗悪な形態のもので固められてしまう原因は、往々にして非常にばかげたところにあるのだ。例えば、倉庫の中に悪趣味で非実用的なランプしか置いていないような大きなランプ工場では、大口の輸出先としてインドでの販売が見込まれている粗悪な型のものばかりを生産しており、その一方で、国内での売れ行きが低いがために、新しい良質の型を製作するには採算が合わなくなっていたりする。

われわれは、植民地インドにランプを販売するために浪費し、しかも視力を低下させるべきであろうか？ 他の問題同様、ここで一般の人々、とりわけ女性たちにとって重要なことは、市場に出回っているすべてのものをよく考えることもなく受け入れたりはせず、また、一時的に美しく見えるようなものを選択することもなく、むしろ、実用性と工業技術的に申し分のない品質こそを吟味することである。

この展覧会が、その点に対する洞察力を鋭くさせるものとなればよいと思う。

翻訳に際しての注

- ・訳文中のゴシック体は、原文中の強調文字（幅広文字）に対応している。
- ・訳文中の〔 〕は訳者による補足である。
- ・雑誌には文章とともに、本稿の解題に掲載した図 5～7 とほぼ同じ構図の 3 枚の写真が挿入されていたが、その印刷が不鮮明であるため、本稿ではその転載はおこなわず、解題の図 5～7 を代わりに掲載することとした。